

チョウの家

～いろいろなチョウを見つけよう！～

? チョウの家って、どんな家なの？

ガラス張りの建物で、中は沖縄と同じくらいの気温（28度）になるように調節しています。二重扉になっているのは、建物内の温度を一定に保つためと、人が出入りするときにチョウが逃げないようにするためです。



? チョウの家には、どんなチョウがいるの？

「チョウの家」では沖縄にいる3種類のチョウを育てています。成虫のほか卵、幼虫、蛹なども観察することができます。

・オオゴマダラ（タテハチョウ科）

アゲハチョウより大型のチョウで、ゆったり飛びます。幼虫は黒色と黄色の縞模様があり、赤い斑点や多数の角があり、目立ちます。これは食草となるホウライカガミにある毒を体にため込むことで、天敵となる鳥への警告色としていわれていると考えられています。蛹は美しい黄金色で食草や食草近くの葉の下などにぶら下がります。



オオゴマダラの蛹



・リュウキュウアサギマダラ（タテハチョウ科）

琉球（むかしの沖縄のよび方）にすむ、“あさぎ色（うすい藍色）”をしたマダラチョウのなかまです。幼虫は細かい斑点がありツルモウリンカを食草とします。蛹は黄緑色で葉や枝にぶら下がります。



・シロオビアゲハ（アゲハチョウ科）

黒色のチョウですが、羽に白い帯模様があるためシロオビアゲハと呼ばれています。幼虫と蛹は、京都で見られるアゲハチョウによく似ています。食草もミカン科の植物でアゲハチョウと同じです。



? いろいろな植物があるのはなぜなの？

チョウの幼虫は、種類ごとに食べることのできる植物（食草・食樹などといいます）が決まっています。その植物がなければ成長することができません。チョウを代々育てていくには、食草となる植物を育てることが重要です。特にオオゴマダラの食草となるホウライカガミやリュウキュウアサギマダラの食草となるツルモウリンカは京都に自生していません。そこで、科学センターでは「チョウの家」の隣の温室や屋外園で、3種類のチョウの食草となる植物を大切に育てています。こうして「チョウの家」に沖縄のチョウを飛ばすことが可能になるのです。

また、成虫はいろいろな花の蜜を吸うことができます。そこで、蜜を出す植物（蜜源植物）を数多く栽培しています。ところどころに置いてあるスポンジには薄めたはちみつなどの液をしみこませ、花の蜜の代わりにしています。

探究・研究コーナー！ 調べてみよう！

ここでは、主に成虫の姿を紹介しています。「チョウの家」で、卵や幼虫とその食草、蛹などを探してみましよう。
※生育サイクルの関係で、すべての状態をいつも見られるわけではありません。